報告 IV

内モンゴル近現代文学研究からみた『青旗（フフ・トグ）』紙
――モンゴル語定期刊行物の研究現況に言及しつつ

内田　孝

はじめに

20 世紀初頭，ロシアと対峙するため内モンゴル東部地域に足がかりを求めた日本と, モンゴル社会の立ち遅れを認識し日本を手本として近代化に着手しようと考えた内モンゴル東部の王侯は, それぞれに利があるとみなし協力的関係を結んだ。それから 30 年後，中国東北部に権益を獲得し，それを一層強化・拡大させることを望んだ日本は傀儡国家である満洲国を建国し，さらに蒙疆政権の成立を後押しした。そうした状況で，1930 年代以降の内モンゴル地域のほとんどは満洲国，もしくは蒙疆政権の領域に含まれ，1945 年 8 月の日本の敗戦と内モンゴル地域からの撤退までの間, 実質的に日本の支配下に置かれた。

この 20 世紀初頭から 1945 年までの間，内モンゴル地域をはじめ清朝・中華民国の東北部，北京，南京などでは多数のモンゴル語定期刊行物が生み出され，モンゴル人の教育，学術，文化，社会に一定の影響を及ぼしたと考えられる。その一例が，モンゴル近現代文学への影響である。本稿では，20 世紀前半期の特に日本と関わりのあるモンゴル語定期刊行物を中心にその歴史をまとめながらそれら刊行物に関する研究の現況を述べ，最後に『青旗（フフ・トグ）』新聞を用いた文学研究について紹介することとする。

1．20 世紀初頭におけるモンゴル語定期刊行物の歴史

内モンゴル地域における最初のモンゴル語定期刊行物は，ジョスト盟ハラチン右旗（現在の赤峰市ハラチン旗）にて発刊された。農業・鉱業調査のため同旗を訪れた日本人は帰国後に「喀喇沁王府見聞録」をまとめたが，そこには 1905 年 9 月に現地の「守正学堂」（武備教育を行う学校）で『星期公報』という謄写版モンゴル語・漢語新聞が発刊されており，刊行の目的として「此新聞紙ヲ以テ王ヘハ下情ヲ通シ下ヘハ王ノ意ヲ伝ヘント」することにあると記されていたと述べている［忒莫勒 2010：128］(1)。また，1905 年冬から同旗の「崇正学堂」（初等教育を行う学校）では『嬰報』という石版モンゴル語新聞を隔日刊で刊行し，無料配布していたとする記録がある［吳恩和ほか 1979：109］。これらの新聞は現存が確認されていないが，1906 年 4 月から約 10 ヶ月間，ハラチン右旗に滞在して女学堂の教師を務めていた鳥居きみ子は，「王府にては謄写版にて蒙文の機関新聞を毎月二回発行せられ，其記事は大方は教育に関することのみにして，就中女子の教育を大に奨励され「今日我喀喇沁の女子教育のやうやう盛なるは祝す可き事にて，やがては我全蒙三百万の同胞の為ぞ，我蒙古百年の後の強盛こそ，之等良妻賢母の手によりてこそならめ」と云ふが如き意味にて其志あるところ真によろこぶ可し」［鳥居 1927：929］と，モンゴル民族の興隆を念頭に置いた教育の振興が主な内容であったと記している。

当時の内モンゴルは旗ごとに王侯貴族が支配者として君臨する封建的身分社会であったが，ハラチン右旗のグンサンノルブ郡王（チンギス・ハーンの功臣ジェルメの末裔）とその妃（清朝皇族の粛親王の妹）は開明的な人物であり，旗の近代化に向けた社会改革を積極的に推進していた。例えば，初等教育・武備教育・女性教育を目的とする 3 つの学堂の創設，絨毯・石鹸・蝋燭を自旗内で製造する工場の建設，電信・郵便制度の開設などを行っていた。同旗における新聞の刊行もまたこうした近代的社会基盤の整備の一環であり，上意下達によって教育の振興に力を注ぎ，立ち遅れたモンゴル社会を発展させようと志向する活動なのであった。旗内で新聞を発行するのであれ

ば，識字率を向上させ，民衆の一人一人が自分で文字を読める状態にならなければ意味がない。グンサンノルブ王はモンゴル文字（縦書きのウイグル式モンゴル文字）にラテン文字を加えた新しい文字表記を創出し，簡単に読めるように工夫した。そして旗民である老若男女に対して識字運動を行い，成果をあげたという［吳恩和ほか 1979：109］。

それから間もない 1908 年には吉林省にて最初のモンゴル語官報と言える『蒙話報 Mongγul Üsüg-ün Bodurul』（1908 年 4 月?～?）(2)が創刊され，1912 年に中華民国が成立してからは，北京，南京などでモンゴル語定期刊行物が刊行された。それらの中には，一つの雑誌・新聞がモンゴル語部分と漢語部分に分かれて完全対訳形式になっている蒙漢合璧形式や，完全ではないが部分的に漢語とモンゴル語が併記されている部分的対訳形式が多数存在した(3)。中国や日本においてモンゴル語定期刊行物の所蔵調査を網羅的に行ったフフバートル氏は，20 世紀前半期に発刊されたモンゴル語定期刊行物を 109 種類確認しており，うち約半数の 53 種類が蒙漢合璧形式（部分的対訳の形式も含む数字と思われる）であったと述べている［フフバートル 1997a：9, 19］。それはつまり，そうした冊子が配布される地域にはモンゴル語話者であるモンゴル人だけが居住していたのではなく，漢語話者である漢民族もしくはモンゴル語で文章を読むことよりも漢語で読むことに熟達した漢民族・満洲民族の文化的影響を強く受けたモンゴル人たちも多く混在していたことを示している。

また，この 20 世紀前半期におけるモンゴル語出版史において特筆されている出来事がある。それは上述のハラチン右旗から 1906 年に日本に派遣され，医学を学んで帰国したテムゲト（汪睿昌）というモンゴル人青年が，1919 年頃から天津にいる日本人の元を訪れて活字の製作・印刷技術を学び，1922 年にモンゴル文字の鉛活字の創出に成功したことである。これが中国内のモンゴル人による最初のモンゴル文字活字の製作であり，彼は北京に「蒙文書社」を設立してモンゴル語の文学作品や学習教材など 50 種余りを刊行し，モンゴル語出版物市場を開拓した。テムゲトが作成したこの活字はその後北京を離れて 1930 年に南京へ運ばれ，1936 年には満洲国の王爺廟へ，さらに

1937 年には蒙疆政権下のフフホトへ，そして 1939 年に張家口へと転々と移動しながら，様々な組織が発行する新聞・雑誌に用いられ続け，モンゴル語活字メディアを担う重要な器材として存在感を示した（例えば，注 3 にあげた刊行物のうち，『蒙古旬刊』と『蒙古週刊』はテムゲト作成の活字によって印刷されたものである）。

ただし, 中国内におけるモンゴル文字の活字印刷物はそれ以前からも存在していた。最も古いものでは 1890 年代後半から 1930 年代前半にかけて，上海にあった英国外国聖書協会が発行していたモンゴル語訳聖書シリーズが活字印刷で作られていた。また，活字新聞もすでに 2 種類刊行されていたもののその発行母体はいずれもモンゴル人ではなかった。まず帝政ロシアの東清鉄道が，1906 年 3 月からハルビンで漢語新聞『遼東報』を刊行したのに続き，1909 年 5 月頃から同じハルビンにて『（モンゴル新聞）[4] Mongɤul-un Sonin Bičig』を創刊した[5]。この新聞は当初は半月刊であったが，辛亥革命によって清朝が滅びた後の 1912 年 11 月からは発行回数を増やして週刊となり，ロシア革命後もしばらくは停刊せず，1919 年 4 月までは発行されていたことが確認されている［ボルジギン 2012：40］。ロシア人が約 10 年に及んでモンゴル語新聞を刊行し続けたのは, この新聞を通じてモンゴル人の間に親ロシア的感情を醸成することを目的としていたからであった。一方，これに対抗した日本も，漢語，モンゴル語の新聞を刊行した。南満洲鉄道株式会社や外務省の支援を受けた中島真雄は奉天（瀋陽）にて 1906 年 10 月から漢語新聞『盛京時報』を発刊していたが，1918 年 8 月になるとモンゴル語新聞『奉天蒙文報 Mügden-ü Mongɤul Sedkül』を活字で刊行した[6]。このモンゴル語新聞もモンゴル人の中に親日的傾向を作り出すことを目的として配布したもので，利益をあげることを目的とした商業新聞ではなかった。配布先は「主に奉天の喇嘛廟即ち黄寺と，当時赤峰の領事であつた北條太洋氏とに嘱して東蒙一帯の配達機関に充てた」［中島 1944：46］という。当時のモンゴル社会においてモンゴル語の読み書きができたのは主にラマ僧であり，民衆から崇敬の念を受けていたので，特にラマ僧たちに対し宣伝活動を行っていたと考えられる。この新聞の発行がいつまで続いていたかは不明だ

が，石濵文庫所蔵分によれば 97 号（1920 年 6 月 12 日付）までは継続していたことが確認される。

このように 20 世紀初頭の内モンゴル東部およびその周域においては，モンゴル人自身以外にも，ロシアおよび日本が戦略的必要性から，モンゴル人向けの活字新聞を発行し，モンゴル人に配布していた。それらはモンゴル自身の発案や資金によって主体的に作られた新聞ではなかったが, 新聞の記事執筆・製版・印刷には内モンゴル人自身も加わっていたことから，彼らがモンゴル語新聞の作成に実際に関与することで, 新聞発行の意義や効果を認識し，また，編集・印刷の技術を習得していったことは確かであったろう。

2．満洲国・蒙疆政権期におけるモンゴル語定期刊行物とその研究状況

1930 年代に入ると，日本は内モンゴル東部地域およびフルンボイル地域を支配し，傀儡国家「満洲国」（1932-45）の一部とした。さらに関東軍は内モンゴル中部地域（満洲国に含まれたモンゴル地域を東部内モンゴル，蒙疆政権域を西部内モンゴルと呼ぶ場合もある）へと勢力を拡大し,「蒙疆政権」（1937.10～：蒙古聯盟自治政府, 1939.9～：蒙古聯合自治政府, 1941.8～1945.8：蒙古自治邦）を成立させた。日本によるモンゴル語新聞・出版物刊行の政策もこの両地域において区分され, それぞれ異なるモンゴル語定期刊行物が発行された。大阪大学附属図書館（旧大阪外国語大学図書館）が所蔵している石濵文庫のモンゴル語定期刊行物も，外モンゴルで刊行された『（首都フレー（庫倫）新聞）Neyislel Küriyen-ü Sonin Bičig』（1910 年代後半期に刊行）と『朔方日報 Šuwě Fang-un Edür-ün Sedkül』（1920 年に刊行）の 2 種，そして上述の『奉天蒙文報』(7)を除けば，ほかはすべて満洲国・蒙疆政権において 1930 年から 1945 年の間に発行されていた新聞であった（石濵純太郎氏がこれらモンゴル語刊行物をいかなる経路で入手し得たのかは定かでないが，この点についても今後解明が望まれる）。

満洲国，蒙疆政権において継続的に刊行されていた主要な雑誌，新聞には

以下のものがある。雑誌・新聞の区分，誌紙名，〔　〕内に発行機関と発行地，そして発行号数と発行期間を以下に記す（出版物の発行年の表記は，満洲国では「康徳」，蒙疆政権では「チンギスハーン紀元」が用いられていたが，本稿では西暦表記で統一した。また，現存が確認されておらず創刊および廃刊の年月が不明である場合は「?」を付した）。また，石濵文庫が所蔵する刊行物については，筆者が所蔵を確認した号を【　】内に付す。

まず，満洲国では下の新聞，雑誌が刊行されていた[8]。

1）雑誌（月刊誌）『丙寅 Ulaɤan Bars』〔モンゴル文学会，北京→開魯〕，4 号（1936.11?）～1944 年

もともとは 1927 年 1 月にブフヘシグらが北京に設立した民間文芸団体であり，機関誌を計 3 号刊行して停刊していた。その後満洲国の開魯に移転して 4 号を発行し，1939 年 1 月からは月刊誌を石版で刊行した[9]。

2）雑誌（月刊）『蒙古報 Mongɤul Sedkül』〔興安総署総務処調査科→蒙政部総務司調査科，新京〕，1 号（1934.5）～29 号?（1936.9）[10]?

3）新聞（週刊）『蒙古新報 Mongɤul Sin_e Sedkül』〔蒙政部総務司文書科新聞班→興安局→蒙古会館，新京〕，1 号（1937.1）～200 号（1940.12.6）?【2（1937.1.22），66（1938.5.13），67（同.5.20），137（1939.9.22）～200（1940.12.6）の各号：179 号は欠号】

4）新聞（週刊）『児童新聞』Keüked-ün Sin_e Sedkül』（『蒙古新報』付録）〔蒙古会館，新京〕，1 号（1938.8.19）～107 号余り（1940.12）?【58（1939.9.22）～107（1940.9.6）の各号：99 号は欠号[11]】

5）新聞（週刊→旬刊）『青旗 Köke Tuɤ』〔青旗報社，新京〕，1 号（1941.1.6）～178 号（1945.7.23）?【1～178 の各号：16，41，49，159，176 の各号は欠号。2 号 7・8 面，61 号 3・4 面は欠面もしくは図書館が未複製】[12]

6）雑誌（隔月刊）『大青旗 Yeke Köke Tuɤ』〔青旗報社，新京〕，1 号（1943.1）～13 号（1945.1）[13]?

また，蒙疆政権においては下の新聞，雑誌が刊行されていた[14]。

1）新聞『蒙古週刊 Mongɤul-un Doluɤan edür-ün Sedkül』〔蒙古聯盟自治政府外交処，厚和〕1 号（1938.6～?）

2）新聞（週刊）『蒙古新聞 Mongγul-un Sonin Sedkül』〔蒙疆新聞社，張家口〕，1940.6?～→1942.10〕

3）新聞（週刊）『蒙古新報 Mongγul Sin_e Sedkül』〔蒙疆新聞社蒙文部，張家口〕，1 号（1942.10）～?号 1945?〕【223（1944.9.18），227（同.10.16），230（同.10.30。紙面に記された号数は誤記で正しくは 229 号），231（同.11.6。紙面に記された号数は誤記で正しくは 230 号），231（同.11.13），236（同.12.18），237（同.12.25）】

4）雑誌（月刊，蒙漢合璧）『文化専刊 Udq_a Soyul-un Tusqai Darumlal』『蒙古文化 Mongγul-un Udq_a Soyul-un Darumal』〔フフホト，1939.4?～1940.2?〕

5）雑誌（月刊）『（復興蒙古の声）Dakin Manduγsan Mongγul-un Čimege』〔張家口，1 号（1940.10?）～1942.1?〕

なお，このほか日本国内においても 1930 年以降，日本留学しているモンゴル人学生が組織した学生会，それに日本で働いているモンゴル人（例えば駐日満洲国大使館に勤務していたハーフンガーら）が加わった同郷会が組織され，3 種類の機関誌が刊行されていたことが確認できる。『祖国 Ijaγurtan Ulus[15]』創刊号（1930.夏）・2 号（1931.1.1），『漠声 Mangq_a-yin Qongq_a』創刊号（1935.4.13, 宗文社），『（新モンゴル）Sin_e Mongγul』創刊号（1941.7.5）～4 号（1944.9.15）（1～3 号は東京の文聖舎，4 号は張家口で印刷）[16]である。また，日本が軍事力を誇示する目的で作られたグラフ雑誌『FRONT』もモンゴル語版が作られ，海軍号と陸軍号の 2 冊が刊行された（1942?，東方社。訳者は服部四郎，サイチンガー）[17]。

これら満洲国および蒙疆政権で刊行された新聞の多くは商業的利益や刊行の採算を取ることは念頭に置いていなかったと考えられる。民間であれ公的機関であれ新聞発行事業を起こして，印刷機材を整備し，記者や印刷技術者を雇用し，郵便・鉄道などの輸送手段を用いて各地に配布し，定期的刊行を継続するには，資本が必要となる。また，読み手側も国内外の政治・経済・社会・教育などの時事問題に関して最新情報を得たいと欲し，そのために現金を支払える家計状態になければ，新聞発行事業は成立し得ない。この点を考えると，当時の内モンゴル地域ではモンゴル語新聞を販売する民間新聞社

の誕生は望むべくもなかった。日本国内で発行されていた日本語雑誌『蒙古』には，1943 年 1 月 14 日の情報として，興安北省域内でガリ版印刷のモンゴル語新聞の発刊を決定したというニュースが掲載されている。そこには新聞の内容について，「大東亜戦争のニュースだけでなく省の施策方針はもとより蒙古地帯のあらゆる問題を戴録する筈である」と述べた後で，モンゴル語新聞の発行意義と読者層に関し，「従来は蒙古人には字の読めるものが少い［原文ママ：引用者］から新聞発行は無駄であると云つた様な意見もあつたが，蒙古人の間に字を読むものが少ければ少いだけ字を読むものが尊ばれ，その人達の言つたことは信用されることになるので，字を読む人達の手に渡るだけでも印刷して配布することになつたものである」［『蒙古』1943-3：130］と記されている。この記事からは，1943 年初頭時点においても，字を読めないモンゴル人が大半を占めており[18]，日本がモンゴル語活字新聞を用いてモンゴル人に対し官製の情報を流布することの効果について，疑問視する声も根強く存在していたことが明らかとなる。

満洲国・蒙疆政権期の定期刊行物は，中国では文化大革命のような政治的混乱の中で処分されたケースも多かったと考えられ，中国国内に現存されているものは少ない。一方日本国内には，モンゴル語教育が行われ内モンゴルと関わりが深かった大阪大学（旧大阪外国語大学）と東京外国語大学，また東洋学研究機関である東洋文庫などに一部が保管されている。満洲国時代の新聞を例にとると，『青旗』新聞は数年前までは石濵文庫と東京外国語大学以外には所蔵が確認されていなかった（注 12 で述べたように，現在は新たに中国および日本国内からも見つかっている）。また，『児童新聞』の場合は内モンゴル自治区図書館に計 4 号分所蔵されているほかは日本の東洋文庫に計 20 号分と石濵文庫に計 48 号分（東洋文庫と石濵文庫の号数は重複しない）が所蔵されているのみである。しかし近年，大学や研究機関の図書館の蔵書整理や故人となったモンゴル関係者の蔵書の中などから，モンゴル語定期刊行物が新たに発見され，欠号を補ったり，これまで知られていなかった新しい刊行物が見つかる事例もある[19]。さらに，データベース化・情報ネットワーク化の向上によって，各機関の所蔵資料情報を確認しやすくなった

こともこうした資料調査の進捗に寄与している。

20 世紀前半期に発刊されたモンゴル語定期刊行物資料の収集・調査作業と平行して, 刊行物そのものに関する研究あるいは刊行物に掲載されている情報を用いた多様な研究もなされ，その成果が公表されつつある。次にそうした研究成果の主要なものを述べる（漢語で書かれた研究資料は〔漢〕，日本語で書かれた研究は〔日〕, モンゴル語で書かれた研究は〔モ〕と付す）。

まず，20 世紀前半期のモンゴル語定期刊行物に関する研究に最も早く着手し，以後研究を重ねている内モンゴル自治区図書館研究員のトゥイメル（忒莫勒, 白燎原）氏は定期刊行物それぞれの個別研究（［忒莫勒 2001］〔漢〕，［忒莫勒 2002a］〔漢〕など）を行いつつ，［内蒙古自治区图书馆 1987］〔漢〕，［忒莫勒 2010］〔漢〕という 2 冊の書籍を刊行し，当時の刊行物の全体像を把握しようとしている。特に後者では，中国内で刊行されたモンゴル語定期刊行物と内モンゴル域内で刊行された漢語・日本語・ロシア語を含む定期刊行物について所蔵している機関と所蔵号数, そして書誌情報をまとめている。筆者が同書のモンゴル語刊行物の索引［忒莫勒 2010：466-474］によって数えたところ，1905 年から 1949 年 9 月までの間にモンゴル語新聞は 52 種類（うち現存未確認 22 種類），モンゴル語雑誌は 72 種類（うち現存未確認 16 種類）が発刊されていたことになる。また，日本においてもフフバートル氏が 1990 年代以降に日本国内をも含めて広範な所蔵調査を行い，モンゴル語刊行物の全体像をまとめている（［フフバートル 1997a］〔日〕，［同 2007］〔日〕など）。また，北京図書館から刊行された［中国蒙古文古籍総目 1999（下巻）：2221～2239］〔モ〕には「定期刊行物」の項目があり，書誌情報と所蔵機関情報がまとめられている。さらにモンゴル学百科全書シリーズの文学巻と新聞出版巻（［蒙古学百科全書・文学巻 2002］〔モ〕，［蒙古学百科全書・新聞出版巻 2003］〔モ〕）の中にも，1945 年以前の定期刊行物に関する見出しが多く立てられ，詳細な解説が付されている。

満洲国期における主要定期刊行物の変遷と紙誌面の考察を行った研究として［広川 2007］〔日〕，満洲国・蒙疆政権期の主要定期刊行物と出版社について概説した研究として［金海 2008］〔漢〕などがある。

定期刊行物を用いた個別分野研究としては，日本のラマ教政策を分析した［広川 1998］〔日〕，『蒙話報』紙や『丙寅』誌を用いてモンゴル語近代語彙の形成を考察したフフバートル氏の研究（［フフバートル 1997b］〔日〕，［同 2012］〔日〕など），『青旗』新聞の掲載記事を用いた教育・民族意識に関する研究（［娜仁格日勒 2012a］〔漢〕，［同 2012b］〔漢〕）がある。

文学関連では，『大青旗』に掲載されたエルデムトゥグスの戯曲「ホンゴルジョルの出征」を論じた［二木 1998］，『奉天蒙文報』に掲載された文学者ヘーシンゲーの作品を論じた［Fütaki2002］〔モ〕，『青旗』新聞に掲載されたサイチンガーの作品研究（［拙稿 2002］〔日〕，［拙稿 2004a］〔日〕），『青旗』紙および『大青旗』誌の大要と一部翻訳紹介（［ウリジバヤル 2007］〔日〕，［同 2009］〔日〕，［同 2010］〔日〕），満洲国・蒙疆政権期にモンゴル語に翻訳紹介された文学作品に関する研究［拙稿 2008］〔日〕，20 世紀前半期の内モンゴル文学作品を啓蒙性という視点から論じた［Otqunbayar2009］〔モ〕，満洲国期の定期刊行物に掲載された児童文学に関する研究（［永花 2009］〔漢〕，［Konagaya ほか 2013］〔モ〕）がある。

また，定期刊行物の刊行に関わっていた人物について，刊行物の記述を傍証として用いつつ考察した研究として，『奉天蒙文報』紙を用いたボヤンマンダフ研究［二木 2002］〔日〕，同紙を用いたヘーシンゲー研究［ウユンゴワ 2010］〔日〕がある。

さらに近年，『青旗』新聞の紙面の見出しをリスト化する作業も行われるようになった。1941 年刊行分の紙面から民族教育および民族意識の覚醒に関する記事タイトルをリスト化した［娜仁格日勒 2012］〔漢〕，全号の主要見出しをリスト化した［Nondaɤul_a2013］〔モ〕である。

今後も満洲国・蒙疆政権期を含む 20 世紀前半期のモンゴル語定期刊行物を用いて，当時の出版活動の状況，さらにモンゴル社会，教育，文化，歴史，言語，政治，経済，日本との関係，日本の対モンゴル政策などに関する多様な研究が進められていくであろう。そのためには，こうした貴重資料を研究者らが利用しやすい環境を整備することも欠かせない。現状では，こうした資料は現存する巻号が極めて少なく，中国や日本の大学，研究機関，個人の

蔵書などに分散して保管されているため，自ら各地を訪れて個別に閲覧・複写を行う以外に方法はない。そのため，時間的・労力的・経済的手間も多くかかる。また，資料を所蔵する機関の予算的制約などから，閲覧しやすい環境の整備や資料の整理･保管などの諸作業が追い付いていない場合もある[20]。こうした中で近年内モンゴルにおいて, 定期刊行物を影印版書籍として出版する取り組みが増えており, 閲覧の利便性が向上すると同時に資料の劣化破損・散逸消失対策という観点から考えても歓迎すべきことである。まず，日本に留学していたモンゴル人学生らが刊行していた機関誌『漠声』1 号,『新モンゴル』1 号（ただし奥付が欠）・3 号・4 号を 1 冊にまとめた書籍［呼和浩特市民族事务委员会 2003］が出版された。次に，綏遠（現・フフホト）で 1929 年から 1935 年にかけて刊行されていた 3 種類の定期刊行物，『綏遠蒙文半月刊 Süi Yuwan Mongɤul Üsüg-ün Qaɤas Sarayin Darumal』1 号（1929.11.15）～5 号（1930.1.15），『蒙文週報 Mongɤul Udq_a-yin Doluɤan Edürün Sedkül』1 号（1933.6.30），月刊誌『蒙文嚮導 Mongɤul Γajarči』3 号（1935.5.31）, 6・7 合併号（1935.9.30）を 1 冊にまとめた［呼和浩特市民族事务委员会 2006］, さらに，内モンゴル人民革命党が張家口で発行した『内蒙古国民旬刊 Dotuɤadu Mongɤul-un Arad-un Sedkül』1 号（1925.11.16）～8 号（1926.4.10）を 1 冊にまとめた［ツェデブ，王満特嘎 2007］が出版された。日本国内においても, 満洲国時代の刊行物である『蒙古報 Mongɤul Sedkül』1 号（1934.5.1），興安北分省が配布したモンゴル語・満洲語合璧形式による公報冊子『布告 Sonsɤal』（1934.2.7），ジャラン・アイル（札蘭屯）師道学校校友会の日本語会誌『興安 Kingɤan』5 号（日本語）の 3 冊を含む［新潟大学 2013］が刊行された。

活字印刷物の勃興期であった当時, 書写のための正書法は確定的ではなかった。そのため当時の出版物には，執筆者や編集者によって異なる語彙の表記や誤植と思われる表記が散見される。研究者がそうした資料を利用する際に，誤読したまま引用したり，注釈なしに現代表記へ改めている場合も見られる。また，満洲国・蒙疆政権期のモンゴル語刊行物には，新たに創出され用いられた新単語も含まれており（例えば，日本語の漢字熟語の漢字を 1 字

ずつモンゴル語に置き換えるという方法で生み出された新語彙, 国名・地名・人名について日本語のカタカナ表記をモンゴル語表記に移した語彙など），今日ではそうした語彙は消滅して用いられないことから編纂担当者は表記を把握できず, そのため当時の出版物を活字やパソコン入力で再刊する際に, 間違った文字表記で出版してしまうケースがある。こうしたミスを避けるには影印で刊行し，文字の判読は読者にゆだねるのが妥当である。

3．『青旗』紙と内モンゴル近現代文学研究

1980 年半ばになると，1945 年以前の内モンゴル文学作品や出版社に対しても関心が向けられ始めた。例えば，青年時代に日本とモンゴル人民共和国に留学し, 内モンゴル自治区成立後は中国モンゴル民族を代表する詩人として活躍し，文化大革命中に迫害を受け 1973 年に 59 歳で死去した Na.サインチョグト（1914-73。1947 年以前はサイチンガーという名前を用いていた）の 1945 年以前の著作集『（サイチンガー）Sayičunɤ_a』が 1987 年に刊行された(21)。また，初期日本留学生であり蒙文書社を設立，満洲国時代には興安軍官学校でモンゴル語教員を務めたテムゲトの経歴と蒙文書社に関する資料をまとめた研究書『（テムゲト伝）Temgetü-yin Namtar』が 1989 年に刊行された。この頃から 1945 年以前の定期刊行物を用いた内モンゴル近現代文学研究が本格的に開始されるのである。内モンゴル近現代文学の研究者が 1945 年以前のモンゴル語刊行物に出会い，さらにその中にそれまでの文学史からは抜け落ちていたすぐれた文学作品が埋もれていることを知って衝撃と感動を受けている様子が伝わってくる文章を，ここで 2 つ紹介したい。

まず, 文学研究者の故ショガラー氏（元・内モンゴル師範大学教授）は 1988 年秋，モンゴル族文学史研究に関する国家プロジェクトの一環として，中国国内に所蔵されているモンゴル語新聞・雑誌資料の総合的調査を行った。そして 1990 年，文芸誌に「（大洋から真珠をすくい上げた記録）Dalai-ača subud šügügsen temdeglel」と題する記事を掲載した［Šuɤar_a1990］。その文章の中でショガラー氏は，1939 年 7 月刊行の『（蒙古学院成立一周年記念誌）Mongɤul-

un Surulɤa-yin Qoriyan-u Surɤal Negegegsen Jil-ün Oi-yin Durasqal-un Sedkül』の中から「（ゴビに咲く花）Γobi mangq_a-yin čečeg」というタイトルの短篇小説を発見したこと，この作品が内モンゴル近代文学の珠玉の名作として高く評価できることを驚きと喜びを込めて報告し，作品の全文を紹介した。小説には，モンゴル民族の復興という大きな目的のために外国に留学している主人公である青年「私」と，彼を無私の心で支える恋人と養父母の姿，彼らの葛藤，そして恋人の病死という悲劇的結末を迎える仮構世界が描かれている。作者は厚和（フフホト）の蒙古学院や大阪外国語学校（大阪外国語大学の前身）で教員を務めていたエルデムバータルである(22)。この作品はその後，『青旗』紙 36 号（1941.11.22）にも転載され，全文が紹介された。

次に，文学研究者ゲレルト氏（元・内モンゴル大学教授）が『青旗』紙と出会った時の光景を，当時大阪外国語大学大学院で学んでいたテクスバヤル氏は次のように描写している。1994 年秋にゲレルト氏が大阪外国語大学附属図書館（当時）へ文献調査に訪れた時のことである。「ゲレルト先生とオヨン先生（引用者注：ゲレルト氏夫人）を橋本先生が引きつれ，私は先生方のお供として，図書館に入った。間もなく『青旗』新聞がゲレルト先生の眼前に広げられた。その瞬間，先生は身震いし手足が小刻みに震えている様子が見てとれた。しばらくの間，新聞が目の前に並べられており自分も手に持っていることすら分かっていないようだった。それからやっとカメラを取り出したが，カメラを持つ手はまだ震えていた。（改行）隣にいたオヨン先生はこのことに気付かなかったかもしれない。ゲレルト先生自身も知らなかったのではないか。しかし，すぐ横に仕えていた私はすべて見ていた。（改行）それはゲレルト先生の内奥から出た，自然的な，長い時間探し回っていた自分の乗用馬を連れ戻すことができた時のそうした震えであった」［Tegüsbayar2008：23］。ゲレルト氏はこの訪日時に収集した満洲国・蒙疆政権期の定期刊行物の中から，文学作品を選び出し，注釈を加えて，1998 年 11 月，『異草集（モンゴル語タイトルの直訳は「谷間の青草」，またサブタイトルは「1931-1945 年期におけるモンゴル文学選」）Soɤu-yin Noɤuɤ_a』を刊行した。同書の中で，詩歌，散文，短篇小説，物語（民話・童話を指す）

の 4 項目に分類し，出典，作品解説，ゲレルト氏が調査し把握し得た作者の経歴を記している。本に紹介されているのは計 62 人（ほかに無署名 5 人）で，詩歌 84 作品，散文 22 作品，短篇小説 11 作品，物語 15 作品の計 132 作品が含まれる。これらは主に『青旗』紙から抜粋した作品であり，ゲレルト氏が数えたところでは『青旗』に文学作品を寄稿していた人は計約 180 人いた［Gereltü：4］。この 1 冊によって満洲国・蒙疆政権期のモンゴル語文学作品が初めて人々に知られるようになり, 以来内モンゴル近現代文学の研究者，修士課程および博士課程の院生らがこの時期の文学作品に関心を抱き，研究テーマとして選ぶ人が現れるようになった。こうしてみると，『青旗』紙を用いたモンゴル研究がまず文学の分野から始まったのも当然の流れであったと言えよう。内モンゴルの研究者や院生の多くは原資料を閲覧するために石濵文庫まで訪れることはせずに，この書籍『異草集』を用いて研究を行う場合が多い。ただし，注意しなければならない点は，同書に紹介されている作品と『青旗』新聞に掲載されている原文とを比較すると，同一でない表記も少なくないという点である。この原因について筆者は，新聞紙面を撮影した写真の中の文字が小さかったためにそれを文字に復元する過程において, 誤記が生じたのであろうと考えている。この理由から, 今なお『青旗』紙に掲載された文学作品の研究をする場合には, オリジナルの原文を確認する作業は欠かせない。

筆者は『青旗』紙を用いた文学研究として，サイチンガーという人物の作品研究とモンゴル語翻訳作品研究の二点を主に行った。前者は［拙稿 2002］と［同 2004a］に，後者は［拙稿 2008］にまとめられているので，ここでは前者について簡略に述べることにする。

サイチンガーは 1937 年 4 月に蒙疆政権からの留学生として日本へ派遣され，東洋大学の専門部倫理教育科で教育学を学び，1941 年 12 月に帰国，その後は女学校の教員や徳王秘書を務めた人物であった。日本留学中の 1941 年 1 月に満洲国で『青旗』新聞が創刊されると，彼は蒙疆政権側の出身であったにもかかわらず積極的に記事を投稿し，第 2 号（1941.1.13）から第 55 号（1942.4.4）までの計 19 号に 31 篇の詩や散文を発表した。筆者は特にそ

れらのうちの科学知識を紹介した短文 12 篇（例えば，「火を作る法」，「電気」，「科学の元祖 ターレス」などと題する短文）に注目し，それらが日本の科学ジャーナリスト原田三夫が著した『子供に聞かせる発明発見の話』（誠光堂，1937）という書籍からの翻訳文であることを明らかにした。また，54 号（1942.3.28）と 55 号（1942.4.4）に連載された世界著名人の名言集『心の光』の原典が文庫本『天の声地の声』（大日本雄弁会講談社・キング文庫，1935）であることを明らかにした。前者は彼の全集に未収録，後者は 1943 年に書籍化され全集に収録された訳文とは異なる初稿版である。日本留学中の彼は，上述の 2 種類のほか，歴史研究書（矢野仁一『近代蒙古史研究』，弘文堂書房，1917）の部分訳，文学作品（北原白秋『雀の生活』，新潮社，1920。武者小路実篤『自己を生かす為に』，新潮社，1919）のそれぞれ部分訳，日本のプロパガンダ誌『FRONT』を翻訳していた（『FRONT』は翻訳の依頼を受けて，モンゴル研究者・服部四郎と共訳）。こうした翻訳活動から，彼が日本滞在中に広い分野の書物に関心を示し，日本語を通じて新しい知識を吸収するとともに，そうした新知識をモンゴル人たちにモンゴル語で紹介する意義を認識していたことが明らかとなる。モンゴル社会を発展させる責務を強く自覚し，積極的に翻訳活動に取り組み，活字印刷物による普及というそれまでにない新しい手段を用いて，モンゴル地域の人々に科学知識や新しい思想・価値観を普及させようと尽力していたのであった。また，『青旗』紙に掲載された科学知識や世界の名言を日本語からモンゴル語に翻訳する過程で，彼はモンゴル語の新しい語彙を創出する必要性に迫られ，実際に新単語を作り出していたと推測される。今後は突き止めた日本語原典と彼の訳文の比較なども必要となる。彼は一般に詩人・作家として高く評価されているが，『青旗』紙に掲載された翻訳文を通じて日本留学期の彼の翻訳活動に着目すると，教育者・啓蒙活動家としての一面が鮮明に見えてくる。

次にサイチンガーと並んで『青旗』紙に文学作品を積極的に投稿していたもう一人の青年について述べる。満洲国側のモンゴル青年の中で最も活発に創作活動を行っていたのは，興安学院学生のエルデムトゥグスであり，彼は『青旗』新聞，文芸誌である『大青旗』誌や『丙寅』誌，興安学院校誌『興

安嶺』などに詩・短篇小説・戯曲[23]を好んで寄稿していた［Čaɤan2001：36］。『青旗』紙上には 3 号（1941.4.3）から 97 号（1943.4.3）のうちの計 29 号分に短篇小説，詩歌，散文，翻訳[24]を掲載していたことが確認される。また彼は，1941 年の第一回全満洲男女青少年「生活記」という綴方コンテストに応募し，モンゴル語部門で入選を果たしている。「私の日常生活」と題した彼の作文はモンゴル語で書かれていた原文が服部四郎によって日本語に訳され，ほかの入選者と合わせて書籍化された［満洲国協和青少年団中央統監部 1942］[25]。その中で彼は次のように書いている。「学科は毎日大いに勉強してゐるのですけれど，ちつとも興味がありませんし，私の読んだり書いたりする欲望を押さへることができませんので，私の心はすぐ別のことへ走ります。（改行）物語，雑誌，文学は私の最も好きなものでして，私の心はこれらのものから離れることなく，毎日読書し，寝た間も忘れないほどです。（改行）文章はまづいのですけれど，私はたゆみなく努力するやうに心がけてゐます。ですからものを書くことも私の好きな習慣となりました。一日に何か少しでも書かないとすべきことを忘れたやうな気がします」。ここからは，創作活動に一途に励む文学青年の姿を見て取れよう。上述したように，この時期，文字が読めないモンゴル人も多くいたはずであるが，一方ではこのように読書と文学創作の活動に夢中になる若者も現れていたのである[26]。

この『青旗』新聞にはサイチンガー，エルデムトゥグス以外にも多くの日本留学中の学生，満洲国にあった興安学院，育成学院，陸軍興安軍官学校，建国大学などのモンゴル人学生や国民学校の生徒，そのほか多数の人々が文学作品や論考，図画，ニュース記事などを寄稿していた。何らかのルートで積極的な寄稿を依頼したと思われる人物を「青旗の友 Köke tuɤ-un nökür」に任じ，彼らが寄稿する際には名前の前に「青旗の友」と記される場合が多く見られる。8 号（1941.5.10）3 面には「青旗の友」への任命証書の写真を掲載しており（Köke tuɤ-un nökür を漢字表記で「青旗報社社友」と記している），その人数は刊行初期には 70 数名であったのが［青旗 34 号（1941.11.8）6 面］1 年余り後には 118 人［青旗 88 号（1943.1.3）3 面］へと急増している。一般の寄稿者や「青旗の友」の中には，内モンゴル自治区，中華人民共和国の

成立後に活躍する作家，学者，教育関係者らも多数確認される。『青旗』紙編集部もまた読者からの寄稿を積極的に募っていた。例えば, 1 号（1941.1.6）3 面には読者から原稿を募集する旨簡略に記している。また 1 号 4 面には『青旗』創刊に際し，論説文を募集すると述べ，モンゴル関連の 4 つのテーマ（①教育とモンゴル民族, ②体育とモンゴル民族, ③宗教とモンゴル民族, ④国軍とモンゴル民族）の中から選んで，文章を書いて郵送するよう伝えている。2 号（同年 1.13）5 面では，モンゴル人皆で紙面を作っていこうと読者に呼びかけ，日本留学中の学生に対し，日本の様子，学生生活についての記事を投稿すれば，親兄弟が読んで喜ぶだろうと提案している。そのほかにも，読者は昔話，評論，牧畜・農業，旗で起きた出来事などを投稿するよう呼びかけた。6 面には，投稿する文章は簡潔に書くこと，小さい子供でも読めること，きれいな字で書くことの 3 点に留意するよう注意点を伝えている。3 か月休刊したあとに発行された 3 号 6 面には，第 1 号で募集した論説文の優秀作を掲載し，優秀執筆者には賞金を送付した旨述べられている。また 7 面には，第 2 号刊行後に社内調整のためしばらく休刊したが，本号より刊行を再開するので，読者はニュース・文章・図画などを送付するよう呼びかけた。当時日本に留学しながら『青旗』新聞に投稿していたアルバジン氏からの聞き取りによると[27]，寄稿して掲載されると原稿料が支払われ，そのお金が学生にとってはうれしい小遣いになったという。

このように読者の投稿を増やし, 紙面を作成していこうという編集方針は, それ以前の『蒙古新報』および『児童新聞』とは大きく異なる。一方，子供向け読み物であった『児童新聞』は『青旗』新聞の毎号最終 1 ページを『児童青旗 Keüked-ün Köke Tuɤ』と名付け，再び子供向け記事を掲載した。図画や写真を多用し, 視覚的楽しみも盛り込んだこうした児童向けページの中に, 科学知識を紹介する記事が多く掲載されている。こうしたモンゴル語文章の中には日本語からの翻訳が多く存在すると思われるが, 一体誰がどんな本から翻訳していたのかなど未解明な点は多く残されている。

当初全 8 ページの週刊であった『青旗』紙は 76 号（1942.9.3）から旬刊に減り，89 号（1943.1.13）からはページが半減して全 4 ページとなった。これ

は戦局の悪化により紙の供給が欠乏してきたことと関連する。一方で 1943 年 1 月からは有料のモンゴル語文芸誌『大青旗』が『青旗』と同じ青旗報社から隔月刊で創刊された。『青旗』94 号（1943.3.3）2 面に，講読代金を封筒に入れて送付してこないよう注意を呼びかける記事も見られる。125 号（1944.1.13）2 面，136 号（1944.5.3）2 面などに紙不足の現状を述べて未払いの『青旗』紙，『大青旗』誌の購読料を支払うよう求める記事が掲載されていることから,『青旗』紙もある段階から有料に変わっていたことが分かる。150 号（1944.9.23）2 面には『大青旗』1 冊の値段がモンゴル人 1.2 円，モンゴル人以外 1 冊 2 円と記されており, モンゴル人に対しては購読料の優遇策が講じられていたことも知ることができる。さらに，170 号（1945.4.13）4 面には『青旗』紙の年間購読料が 3.6 円（『大青旗』は年 7.2 円で同じ）とある。戦局が悪化し，新聞の刊行存続すら危うい状況に陥っていた様子がうかがえるが，『青旗』紙および『大青旗』誌の刊行に付随する寄稿者への原稿料の提供や有料でもモンゴル語刊行物を購読しようという読者が生まれていた状況は, 活字文化の定着および職業作家の誕生に向かう社会変化の大きな流れが生まれつつあったことが明らかとなる。

おわりに

以上，『青旗』新聞をはじめとする満洲国・蒙疆政権期，さらには 20 世紀前半期のモンゴル語定期刊行物に関する刊行の経緯，研究の現況，資料の現存状況などを述べた。また，『青旗』新聞を用いた文学研究の状況についても紹介した。

日本国内の大学図書館や研究機関に保存されてきた貴重なモンゴル文化遺産であるこうした刊行物が国内外の人々によって活用される環境が一層整い，より多くの研究成果が生み出されるよう期待したい。

注

(1) この見聞録はJACAR公開資料「蒙古喀喇沁王ノ依頼ニ依リ本邦技師農業鉱山調査一件」［Ref：B04011142900, p.50］で閲覧可能である。なお，この時の鉱山調査をまとめた書籍『清国内蒙古喀喇沁王部鉱業調査報文』（出版社不明，1906）は国会図書館デジタルコレクションで閲覧できる。

(2)『蒙話報』の研究は［フフバートル 2012］などを参照。

(3) 中華民国期のモンゴル語定期刊行物は大阪大学外国学図書館（旧大阪外国語大学図書館）の書庫にもまとまって所蔵されているが，十分知られておらず，［フフバートル 1997a］および［忒莫勒 2010］の所蔵データにも含まれていない。筆者が確認した大阪大学外国学図書館が所蔵する（石濵文庫の所蔵ではない）中華民国期モンゴル語定期刊行物の書誌名・所蔵号数などのデータは下記の通りである。これら資料も他所に現存が確認されていない，もしくは数部しか現存しない貴重資料である。

- 『蒙文白話報 Mongɤul Yerü Üge-yin Sedgül』（中華民国政府蒙蔵事務局弁報処編輯発行，北京）1（1913.1 月）～18（1914.6 月）
- 『蒙文報 Mongɤul Udq_a-yin Sedgül』（中華民国政府蒙蔵院弁報処編輯発行，北京。『蒙文白話報』の後続誌）第 2 期（1915.5.15），第 3 期（同年 6.15），第 3 巻第 2 期（1916.2 月），同巻第 4 期（1916.4 月）
- 『蒙旗旬刊 Mongɤul Qosiɤun-dur Tarqaɤaqu Arban Edür-ün Darumal』（東北政務委員会蒙旗処，瀋陽）第 3 巻第 13 期（1931 年）
- 『蒙蔵週報 Mongɤul Töbed-ün Dolun Edürün Sedgül』（蒙蔵週報社，南京）第 1 巻第 4 期（1929.10.6）
- 『蒙蔵周報 Mongɤul Töbed-ün Dolun Edürün Sedgül』（蒙蔵周報社，南京。『蒙蔵週報』の漢語タイトル変更）26（1930.5.10）～81（1931.8.21）：28，29，31-36，38，39，49，52，53，57，61 の各号は欠号。
- 『蒙古旬刊 Mongɤul-un Arban Edür-ün Darumal』（蒙古各盟旗聯合駐京弁事処，南京）13（1931.2.10）～35（同年 9.30）
- 『蒙古週刊 Mongɤul-un Dolun Edür-ün Darumal』（蒙古各盟旗聯合駐京弁事処，南京。『蒙古旬刊』の後続誌）37（1931.10.17）～50（1932.1.23）
- 『蒙蔵旬刊 Mongɤul Töbed-ün Arban Edürün Sedgül』（蒙蔵旬刊社，南京）1（1931.9.20）～10（同年 12.20），14（1932.5.20）～26（同年 9.20）

(4) 本稿でモンゴル語の定期刊行物・書籍・記事のタイトルを記す際に日本語タイトルが明記されておらず，筆者による仮訳の場合は括弧付き日本語とモンゴル文字転写文字で記す。ただし，漢語タイトルが記されている場合はその漢語タイトルを，簡体字を日本漢字にした上で表記する。また，同一タイトルについて再度言及する際には漢語・日本語のタイトルのみ表記する。

(5)『モンゴル新聞』の研究は［ボルジギン 2012］などを参照。

(6) 中島真雄はモンゴル語活字の入手方法について，「前年満鉄会社か［原文ママ：引用者］蒙古語の単行本を編成したことを想起し，その活字が凡て満洲日日新聞社の印刷部に於て鋳造せられたことを聞込み得たので，交渉の結果遂に蒙古活字を得るに至った」［中島 1944：45］と回想している。この「蒙古語の単行本」というのは，［南満州鉄道株式会社総務部交渉局第一課（同課内 佐藤富江）：編『蒙古語 Mongɣul Üge』，満洲日日新聞社：印刷（大連），1915 年 5 月発行］であったと考えられる。なお，『奉天蒙文報』が刊行された 1918 年には同じ大連の印刷所で別のモンゴル語会話書［関東都督府民生部殖産課（関東都督府嘱託 宮崎吉蔵：編述）『蒙古語旅行用会話 Mongɣul Üge Kelelčikü Bičig-ün Debter』，満洲日日新聞社：印刷（大連），1918 年 3 月］も出版されている。どちらにも同じモンゴル文字活字が用いられているが，前者は子音の j と y に同じ活字が用いられているのに対し，後者では改良が加えられ新たに y の活字が作られ，区別されている。また筆者は，テムゲトが活字印刷の技術を学んだのは実は天津ではなく，大連のこの満洲日日新聞社の印刷所であった可能性もあると考えている。

(7) 石濵文庫では，『首都フレー新聞』は 2 号～14 号（各号の年月日未確認，7 号は欠号），『奉天蒙文報』は 2 号（1918.8.17）～97 号（1920.6.12）（1 号と思われる 5～16 面もあり。10 号，11 号，60 号は欠号）を所蔵。『朔方日報』は未確認だが，図書館より得た情報によれば 3 号～5 号（各号の年月日未確認）を所蔵している。

(8) 満洲国における主要モンゴル語定期刊行物に関する研究として［広川 2007］がある。

(9) ブフヘシグおよびモンゴル文学会に関する日本国内の研究として，［フフバートル 1997b］，［宇野 1998］などがある。

(10) 筆者が把握した範囲で，現存する『蒙古報』のうち巻号が最も新しいのは，島根県立大学服部四郎ウラル・アルタイ文庫が所蔵する第 29 期（3-9，1936.9 月発行）である。

(11) 筆者の手元には『児童新聞』99 号（1940.7.12）がある。これは大阪外国語学校蒙古語部第 17 回（1941 年 3 月）卒業生である故・澤正信氏の遺族より譲り受けたものである。

(12) 『青旗』新聞は石濵文庫所蔵分だけが現存するものとして知られていたが，近年他からも新たに見つかり，石濵文庫の欠号を補うことも可能となっている。まず，周太平・ナランゲレル両氏からの情報によれば，中国国内から発見された分によって 49 号および 159 号が補える。次に，堤一昭氏からの情報によれば京都大学人文科学研究所の現代中国研究セ

ンターが一部所蔵しているということで，そこから 16 号が補える。さらに堤氏からの御教示を受けて二木博史氏に確認したところ，東京外国語大学所蔵分から 41 号が補えることを確認した。

(13) 『大青旗』誌は内モンゴル自治区図書館，東京外国語大学モンゴル語科研究室，首都大学東京図書館が所蔵しているが，8 号と 9 号が欠号となっていた。筆者は 2014 年 7 月に故楠松源一・元大阪外国語大学モンゴル語科教授の蔵書を調査し，そこに 9 号が存在することを確認した（その後，楠松氏遺族の好意により滋賀県立大学図書情報センターに寄贈された）。なお，［ウリジバヤル 2013］には『大青旗』誌各号（8・9 号除く）の目次の日本語訳が紹介されている。

(14) 蒙疆政権における主なモンゴル語定期刊行物および出版物に関する研究として［金海 2008］がある。なお，特に蒙疆政権のモンゴル語定期刊行物は現存されているものが少ないため，不明点は多い。

(15) 『祖国』を発行した「蒙古留日学生会」は 1930 年春に成立し，『祖国』創刊号の発刊は 1930 年夏頃であった［JACAR B04011358900：7］。『祖国』のモンゴル語タイトルについては，［拙稿 2008：227］参照。『祖国』1 号および 2 号は現存しないが，日本の警察関係者が抄訳したとみられる第 2 号の日本語訳は［JACAR B04011358900］で読むことができる。

(16) 筆者は島根県立大学メディアセンターの「服部四郎ウラル・アルタイ文庫」より，『新モンゴル』誌 1 号および 2 号を見つけた［拙稿 2008］。また，注 13 で述べた楠松蔵書にも『新モンゴル』誌 1〜3 号の 3 冊が含まれていることを確認した。

(17) モンゴル語版『FRONT』の海軍号および陸軍号 2 冊も「服部四郎ウラル・アルタイ文庫」が所蔵している［井上 2005］。

(18) 神尾弐春によれば，この時期満洲国ではモンゴル語の文字改革も検討されていた［広川 2008：45］。それはモンゴル人民共和国においてキリル式文字表記が採用されてキリル式文字で経済・工業関連の書籍が刊行され始めていた状況に対抗するためで，神尾（当時満洲国総務庁参事官），菊竹実蔵（当時青旗報社社長，東京外国語学校蒙古語学科 1 期生），注 6 で触れた佐藤富江（当時蒙古実務学院院長，東京外国語学校蒙古語学科 1 期生［包 2015：6，7］）の 3 人が委員を務め，モンゴル語学者と実務家が幹事として加わって始まったが，満洲国の瓦解により中止となった［神尾 1983：105］。この文字改革の検討作業がいつのことであったかを神尾は記していないが，モンゴル人民共和国でキリル式文字導入のための正書法を決定したのが 1941 年末であった点や神尾らが結論を出す前に満洲国瓦解で中止になった点を考え合わせると，1944 年頃の出来事と想定される。

神尾らの文字改革論議と関連するかは明らかでないが，ちょうどこの1944年に刊行された『新モンゴル』第4号には，チョグジラン，チンゲルテイら日本留学中の学生4人が「（新しいモンゴル文化教育を興隆させるには新しいモンゴル文字を用いることが妥当であるという論説）Sin_e mongɤul-un soyul bolbasural-i delgeregülküi-dür sin_e mongɤul üsüg-i kereglebesü jokiqu sigümjilel」［Čoɤjilang ほか 1944］という一文を掲載し，モンゴル語の表記にラテン文字を採用すべきという見解も表明している。この論考の中で，ウイグル式モンゴル文字の習得が困難な原因として，語頭・語中・語末で一つの文字の形が変化する点，異なる母音・子音を同じ文字で表記することがある点などを挙げ，ラテン文字の採用でこうした欠点を克服できると述べた。さらに，横書きになれば数式を含む文などが表記しやすくなること，欧米言語から借用した外来語をモンゴル語に翻訳せずにそのまま表記できることなどの利点を主張していた。

(19) 例えば筆者は，満洲国で刊行されたモンゴル語月刊誌『鉄騎 Temür Moritu』の第1期第3号（康徳6（1939）年2月号）〔満洲国治安部参謀司調査課，菊版，全92頁〕，モンゴル語新聞『精軍 Qurča Čirig』第25号（康徳6（1939）.5.1）〔満洲国治安部参謀司調査課，タブロイド版，全4面〕をそれぞれ1号分所蔵する。満洲国で『鉄騎』誌が刊行されていたとの情報は［Šuɤar_a1987：22］，［忒莫勒 2010：384］に記されている（忒莫勒氏は誌名のモンゴル語を「Temür Moritu Čirig」，編輯者を「満洲国軍事部」と誤記している）。同誌は大阪外国語学校蒙古語部第10回（1934年3月）卒業生で，満洲国の蒙古会館に勤務しモンゴル語新聞の編集に携わっていた故・徳廣彌十郎氏の遺族より譲り受けたものである。また，『精軍』紙は注11に述べた澤正信氏の遺族より譲り受けたものである。なお，『青旗』14号（1941.6.21）7面のエルデムテゥグスのモンゴル語小説『（春風）Qaburun salkin』の前言の中には，モンゴル語刊行物として『青旗』，『精軍』，『鉄騎』（ただしモンゴル語表記は「Temür Mori」）の3紙誌が挙げられているので，当時は広く知られた雑誌であったと思われる。

(20) 石濵文庫が所蔵するモンゴル語定期刊行物について言えば，利用者がマイクロフィルム化された『青旗』紙，『児童新聞』，『蒙古新報』を閲覧できるようになったのが1990年代後半からで，それ以前は書庫の中の普段は施錠された囲いの中で図書館員立会いのもとで閲覧していた。その後，2005年頃には，マイクロフィルムから複写したと思われるA3サイズの紙面を閲覧室で落ち着いて閲覧できるようになった。また，『奉天蒙文報』は1990年代にはマイクロフィルム化されていなかったが，2002年に筆者の要望に応じてマイクロフィルム化がなされ，その後A3サイズ

に印刷されたものを閲覧可能となった。なお，石濵文庫モンゴル語貴重資料は昨秋より大阪大学総合図書館に移ったが，閲覧用の複写物が用意できていない資料は閲覧不可という状況にある。

(21) 1987 年刊行の書籍『（サイチンガー）』に含まれる世界著名人の名言集『（心の光）Jirüken-ü Gerel』は，1999 年刊行の『（サインチョグト全集）Na. Sayinčoɤtu-yin Bürin Jokiyal』第 7 巻にも収録されている。しかし，全集版では，1943 年版および 1987 年版にあった 176 句のうち 6 句が削除され（乃木希典の 3 句すべて，ムッソリーニの 2 句すべて，チンギス・ハーンの 1 句），ほかにも 4 句の中の一部分が削除されている［拙稿 2004a］。全集版にはこうした削除や改竄が見られるため，1987 年版のほうが信頼のおけるテキストであると言える。

(22) エルデムバータルは雑誌『蒙古文化』第 2 巻第 1 期（1940.1）と翌第 2 期（1940.2）にモーパッサンの代表的短篇小説の 1 つ「首飾り La Parure」を漢語訳からモンゴル語に重訳し，発表した（［Šuɤar_a1990：50］，［二木 2001：30］，［拙稿 2008：50］）。このように西洋文学作品に接し，自ら翻訳まで行っていたからこそ，モンゴルを舞台に，近代的自我を有し民族の発展を希求しつつも恋人との幸福を望まずにいられない青年を一人称で描いた短篇作品を生み出すことができたと考えられる。彼は 1939 年 9 月から 43 年 3 月まで 3 年半，大阪外国語学校（途中，大阪外事専門学校に改称）でモンゴル語を教え，学生時代の故・福田定一（作家の司馬遼太郎）も彼の教え子であった。福田はエルデムバータルが来日前にアメリカ留学していたと述べている（［司馬 1978：207］など）。一方，「ロシアの軍人の学校を出て日本に渡り，軍の通訳」をしていたとの記録［高橋 1970：8］や，南京の中央政治学校で学んだ後すぐに百霊廟に新設した小学校の校長を務めていたとする資料もある（［拙稿 2004b］，［『朝日新聞』1941 年 2 月 26 日付朝刊］）。また，モンゴル語教師を辞して帰国した後の彼の動向も一切不明で，彼の経歴に関しては未解明な点が多く残されている。

(23) エルデムテゥグスの戯曲「（ホンゴルジョルの出征）Qongɤur Jula ökin-ü čirig-tü daɤaɤsan jüčige」は『大青旗』5 号（1943.9）に掲載された［二木 1998］。二木氏はその後半部が 6 号に掲載されている可能性を指摘している。『青旗』131 号（1944.3.13）2 面には「初めてのモンゴル劇」と題した記事が掲載されており，3 月 4 日に建国大学の新入生歓迎会が開かれ，日本人・漢人・モンゴル人・ロシア人がそれぞれ劇を上演したこと，モンゴル人は「ホンゴルジョルの出征」を上演して好評を博し，またこの劇が満洲国で最初のモンゴル劇となったこと，脚本は『大青旗』8 号（1944.3）に掲載されることが記されている。しかし，8 号は現存が確認

されていないので，この劇の後半部は不明のままである。

(24) 翻訳は米国の作家･詩人ヘンリー･ヴァン･ダイクの短篇小説「A handful of clay」で，石井桃子：訳「一握りの土」（山本有三：編『世界名作選 2』日本少国民文庫第 15 巻，新潮社，1936）という日本語翻訳文からの重訳であった［内田 2008：67］。

(25) 第 1 回入選作については［田中寛 2002］，第 3 回入選作については［川村 1998：9-18］，［川村 2000：82, 83］を参照。なお，『青旗』98 号（1943.4.13）4 面には第 3 回募集要項がモンゴル語で掲載されている。

(26) 彼は 1945 年以降は創作活動から離れた。しかし一度だけ，1960 年代に長篇小説執筆のためにペンをとったが，文化大革命が始まると自ら原稿を処分したという［Čaχan2001：40］。

(27) 2003 年 9 月 10 日，フフホトの内蒙古医学院内のアルバジン氏宅での聞き取りによる。日本で医学を学んでいたアルバジン氏は，『青旗』紙 34 号（1941.11.8）から 134 号（1944.4.13）の間の計 14 号分に科学知識・医療の紹介，散文，翻訳詩を掲載していた。

参考文献

井上治 （2005）「『FRONT』モンゴル語版をめぐって」『平成 14 年度～平成 16 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）（2）「戦時下，対東アジア戦略と広告宣伝」研究成果報告書』，pp.11-34

内田孝（2002）「内モンゴルの詩人サイチンガの日本留学期における著作」『日本モンゴル学会紀要』32，pp.1-12

同上（2004a）「サイチンガ『心の光』各版の比較研究」『日本モンゴル学会紀要』第 34 号，pp.43-56

同上（2004b）「大阪外国語大学におけるモンゴル人教師（1922-1950）」『内陸アジア史研究』34，pp.43-64

同上（2008）「『新モンゴル』誌第 2 号とモンゴル人留学生による文芸活動」『北東アジア研究』14･15, 島根県立大学北東アジア地域研究センター，pp.225-243

同上（2008）「近代内モンゴルにおける文学活動と表現意識」，大阪大学博士論文

宇野章 1998「インジナシとブフヘシク ： 近代内モンゴル二知識人の軌跡」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』19，pp.79-93

ウユンゴワ（2010）「ヘーシンゲーのモンゴル民族啓蒙思想について：『奉天蒙文報（ムグデニー=モンゴル=セトグール）』を中心に」『言語・地域文化研究』15，東京外国語大学大学院，p.393-409

ウリジバヤル（2007）「蒙疆政権期被占領地域のモンゴル文学：『青旗』新

聞の作家と作品：」『人文学報』388，首都大学東京都市教養学部
同上（2009）「『フフ・トグ』紙とは何だったか：「新京」で刊行されたモンゴル語新聞の紹介」『中国東北文化研究の広場』2,「満洲国」文学研究会
同上（2010）「「満洲国」時代モンゴル作家の創作①　『別れ』（翻訳）」『植民地文化研究』9，植民地文化学会
同上 （2013）「『イフ・フフ・トグ』 誌について」『新潟産業大学経済学部紀要』42
川村湊（1998）『文学から見る「満洲」』，吉川弘文館
同上（2000）『作文の中の大日本帝国』，岩波書店
神尾弐春（1983）『まぼろしの満洲国』，日中出版
司馬遼太郎（1978）「数千年の重み」（あとがき），司馬遼太郎・陳舜臣：共著『対談 中国を考える』，文芸春秋，pp.207-209
高橋盛孝（1970）「戦前蒙古留学生懐旧談」，鴻山俊雄：編『日華月報』50，pp.8-9
田中寛（2002）「『満洲國の私たち』に描かれた真実」『大東文化大学紀要・人文科学』第 40 号，pp.121-145
鳥居きみ子（1927）『土俗学上より観たる蒙古』，大鐙閣
中島真雄（1944）『不退庵の一生：中島真雄翁自叙伝』，出版社記録なし
新潟大学人文社会・教育科学系附置環東アジア研究センター：編（広川佐保：解説）（2013）『満州国期におけるモンゴル語刊行物』（環東アジア研究叢書 3）
広川佐保（1998）「1940 年代の日本の対内モンゴル政策と『フフ・トグ』紙」『日本モンゴル学会紀要』28，pp.29-41
同上（2007）「満洲国のモンゴル語定期刊行物の系譜とその発展」」『環日本海研究年報』14，pp.104-126
同上（2008）「満洲国のモンゴル語教育政策についての一考察」『近現代東北アジア地域史研究会 NEWS LETTER』20，近現代東北アジア地域史研究会，pp.38-46
二木博史（1998）「満州国時代のモンゴル人文学者エルデムトゥグスの新発見の作品」『日本モンゴル学会紀要』29，pp.1-21
同上（2001）「蒙疆政権時代のモンゴル語定期刊行物について」『日本モンゴル学会紀要』31，pp.17-43
同上（2002）「ボヤンマンダフと内モンゴル自治運動」『東京外国語大学論集』64, pp.67 -88
フフバートル（1997a）「資料編　中国領内発行古いモンゴル語定期刊行物（1905～1950）カタログ」『漢語の影響下におけるモンゴル語近代語彙

の形成』（一橋大学博士論文）
同上（1997b）「植民地のことば—日本語がモンゴル語に与えた影響：「満洲国」におけるモンゴル語近代語彙の形成と淘汰」『和光大学人間関係学部紀要』2，1997，pp.17-27
同上（2005a）「モンゴル語近代語彙登場の母体－『蒙話報』誌（一）：漢字語直訳から始まったモンゴル語語彙の近代化」『學苑』775，pp.1-13
同上（2005b）「モンゴル語近代語彙登場の母体－『蒙話報』誌（二）：吉林蒙話報目録モンゴル文字転写」（上）『学苑』779，pp.A10-A27
同上（2005c）「モンゴル語近代語彙登場の母体－『蒙話報』誌（三）：吉林蒙話報目録モンゴル文字転写」（下）『学苑』780，pp.A10-A27
同上（2005d）「モンゴル語近代語彙登場の母体－『蒙話報』誌（四）：内モンゴル自治区図書館蔵残本二冊と吉林省档案館蔵『蒙文報』誌」『学苑』781，pp.A20-A31
同上（2006）「モンゴル語近代語彙登場の母体－『蒙話報』誌（五）：近代語彙の抽出・分類及び存廃の時代別考察」『学苑』787，pp.13-25
同上（2007）「中国領内発行の古いモンゴル語定期刊行物」『学苑』799，pp.76-89
同上（2008）「モンゴル語近代語彙登場の母体－『蒙話報』誌（六）：資料比較にみる外国語固有名詞のモンゴル語表記」『学苑』816，pp.A31-A39
同上（2012）『モンゴル語近代語彙登場の母体：『蒙話報』誌研究』，青山社
ボルジギン・ブレン（2012）「『モンゴリン・ソニン・ビチグ』（1909-1919）の発行状況と論調：近代モンゴルの活字メディアとナショナリズムの萌芽」『内陸アジア史研究』27，内陸アジア史学会，pp.35-56
満洲国協和青少年団中央統監部：編（1942）『満洲国の私たち』，中央公論社
『朝日新聞』「昔は蒋の『愛弟子』いま日本の学園に」，朝日新聞社，1941 年 2 月 26 日付大阪版朝刊
『蒙古』「蒙字紙発刊」，1943 年 3 月号，善隣協会機関誌，　p.130
JACAR（アジア歴史資料センター）「蒙古喀喇沁王ノ依頼ニ依リ本邦技師農業鉱山調査一件」（外務省外交史料館）, Ref：B04011142900
同上「在本邦中国留学生関係雑件 15. 蒙古人学生ヲ収容スル学園ニ関スル件」（外務省外交資料館）, Ref：B04011358900
Otqunbayar（2009）<1941 on-u ≪Köke Tuɤ≫ sonin deger_e neyitelegdegsen udq_a jokiyal-un sinjilel ＞≪ Öbür Mongɤul-un Yeke Surɤaɤuli Erdem Sinjilegen-ü Sedkül≫3, pp. 95-104
Otqunbayar（2009）<蒙古族現代启蒙文学：1902-1947Odu üy_e-yin soyun gegeregülkü mongɤul udq_a jokiyal：1902-1947>（内蒙古大学　博士学位

論文）
Naɤusayinküü, Narinɤulküü（1989）≪Temgetü-yin Namtar≫, Öbür mongɤul-un sinjilekü uqaɤan teknig mergejil-ün keblel-ün qoriy-a
Nondaɤul_a（2013）<日本殖民统治时期的《青旗》报研究 Yapun-u koluniilal-un noyarqal-un üy_e-yin ≪Köke Tuɤ≫ sonin-u sudulul>（中央民族大学博士学位論文）
Fütaki Kirosi（2002）<Sin_e-ber oldaɤsan Kesingge-yin bütügel-üd>≪Öbür Mongɤul-un Neyigem-ün Sinjileku Uqagan≫2002-1（116）, pp.50-57
B.Gereltü（ゲレルト）（1998）≪異草集 Suɤu-yin Noɤug_a：1931-1945 on-u qoɤurunduki mongɤul uran jokiyal-un songɤuburi≫, Öbür mongɤul-un arad-un keblel-ün qoriy_a
Mongɤul sudulul-un nebterkei toli nayiraɤulqu jöblel <Udq_a jokiyal-un boti> nayiraɤulqu jöblel（2002）≪蒙古学百科全書・文学巻 Mongɤul Sudulul-un Nebterkei Toli : Udq_a jokiyal-un boti≫, Öbür mongɤul-un arad-un keblel-ün qoriy_a
Mongɤul sudulul-un nebterkei toli nayiraɤulqu jöblel <Sonin medege keblel-ün boti> nayiraɤulqu jöblel（2003）≪蒙古学百科全書・新聞出版巻 Mongɤul Sudulul-un Nebterkei Toli : Sonin medege keblel-ün boti≫, Öbür mongɤul-un arad-un keblel-ün qoriy_a
S.Sambuu, Küčün emkitgen nayiraɤulba（1987）≪（サイチンガー）Sayičungɤ-a≫, Öbür mongɤul-un arad-un keblel-ün qoriy-a
Na.Sayinčoɤtu（Sayičungɤ-a）（1999）≪（サインチョグト全集）Na. Sayinčoɤtu-yin Bürin Jokiyal≫, Öbür mongɤul-un arad-un keblel-ün qoriy-a
Ü.Šuɤar_a（ショガラー）（1987）≪Mongɤul Ündüsüten-ü Orčin Üy_e-yin Uran Jokiyal-un Teüke≫, Öbür mongɤul-un yeke surɤaɤuli-yin keblel-ün qoriy_a
Ü.Šuɤar_a（ショガラー）（1990）<（大洋から真珠をすくい上げた記録）Dalai-ača subud šügügsen temdeglel>≪Önir Čečeg≫1, pp.49-55・64
Tegüsbayar（2008）<Soyul-daɤan doɤduluɤsan salɤanal>≪实录 巴・格日勒图教授学术研究与创作文学作研讨会≫, pp.22-25
≪Dumdadu Ulus-un Erten-ü Mongɤul Nom Bičig- ün Yer üngkei Гarčag≫-un nayiraɤulqu jöblel nayiraɤulba（1999）≪中国蒙古文古籍総目 Dumdadu Ulus-un Erten-ü Mongɤul Nom Bičig-ün Yerüngkei Гarčag≫（Douratu）, Begejing-ün nom-un sang keblel-ün qoriy_a
D.Čedeb（ツェデブ）, Wang Manduɤ_a（王满特嘎） nayiraɤulun jokiyaju qaɤuɤulun jasaba（2007）≪Dotuɤadu Mongɤul-un Arad-un Sedkül≫-ün Gerel Jiruɤ-un Baɤulɤaburiari Ariɤudqal Sigüdeg≫（S・Buyannemekü sudulul 1）, Öbür mongɤul-un arad-un keblel-ün qoriy_a

Čoɤjilang・Sečinbatu・Činggeltei・Öljeyibürin（1944）<Sin_e mongɤul-un soyul bolbasural-i delgeregülküi-dür sin_e mongɤul üsüg-i hereglebesü jokiqu sigümjilel>≪Sin_e Mongɤul≫4，Nibpun-dur büküi mongɤul_čud-un qural，pp.16-27
Konaɤaya yüki, Sarangerel, Yüng Quwa nayiraɤulun jokiyaba（2013）≪Qaɤurmaɤ Manju Ulus-un Üy_e-yin Mongɤul Ündüsüten-ü Uran Jokiyal-un Sudulul≫, Öbür mongɤul-un arad-un keblel-ün qoriy_a
包 贺喜格图「关于新京蒙古实务学院的设立及其特殊性的考察」『大阪大学中国文化フォーラム・ディスカッションペーパー』2015-1，pp.1-12
呼和浩特市民族事务委员会：编辑（2003）≪民族古籍与蒙古文化≫3・4
呼和浩特市民族事务委员会：编辑（2006）≪民族古籍与蒙古文化≫9
金海 （2008）<日本占领时期蒙古族新闻出版活动述略>『中央民族大学学报（哲学社会科学版）』4
娜仁格日勒（2012a）＜《青旗》（Küke tuɤ）：珍贵的近代蒙古民族启蒙思想文献＞≪蒙古学集刊≫2，pp.1-17
娜仁格日勒（2012b）＜《青旗》所见近代蒙古民族女子教育＞≪内蒙古师范大学学报：教育科学版≫，pp.26-29
内蒙古自治区图书馆：编（1987）『建国前内蒙古地方报刊考录』
忒莫勒（2001）<《蒙话报》研究>『蒙古学信息』3
同（2002a）<民国初年的《蒙文白话报》和《蒙文报》>『内蒙古师范大学学报（哲学社会科学版）』1
同（2002b）<伪满蒙政部的第一个综合性蒙文月刊《蒙古报》>『蒙古学信息』2
同（2002c）<民国年间的几种蒙文旧报刊>『蒙古学信息』3
同（2004）<伪蒙疆时期的《文化专刊》和《蒙古文化》>『蒙古学信息』1
同（2005）<绥远蒙古文化促进会及其《醒蒙月刊》>，齐木德道尔吉：主编『蒙古史研究』8，中国蒙古史学会，内蒙古大学出版社
同（2006）<喀喇沁克兴额与蒙文铅字印刷>『内蒙古师范大学学报（哲学社会科学版）』1
同（2009）<关于清末民初哈尔滨的《蒙古新闻》>『内蒙古师范大学学报（哲学社会科学版）』3
同：编著（2010）『内蒙古旧报刊考录：1905-1949.9』，远方出版社
永花（2009）<伪满时期的蒙古族儿童文学研究> （中央民族大学博士学位論文）
吴恩和，刑复礼（1979）<贡桑诺尔布>，中国人民政治协商会议内蒙古自治区委员会・文史资料研究委员会:编（1979）≪内蒙古文史资料≫１，内蒙古人民出版社，pp.101-117